

---

# 藤田と斎藤

るうね

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

藤田と斎藤

### 【Zマーク】

Z2001H

### 【作者名】

ねりみ

### 【あらすじ】

土方の提案で、藤田五郎は斎藤一と一緒に仕事をすることになった……。

「齊藤一」は一人いた。

「君たち一人は、よく似ているな」

あれは土方の言葉だつたか。

たしかに、藤田と齊藤はよく似ていた。顔立ち、背格好、声質。ぱっと見た感じでは、双子でもこうは似るまいといつぐらい。違つたのは剣の腕と、纏つまとた血臭けいしゅだつた。実を言えば、藤田には人を斬つた経験すらなかつた。対して、齊藤は新撰組三番隊組長、その戦歴は推して知るべし、である。

「どうだ、これからは一人で組んで仕事をしてみちやあ」

土方がそう言つたのは、单なる思いつきだつたろう。幸か不幸か、その言に反駁はんばくする者が、その場にいなかつた。当時の藤田は新米隊士であり、鬼の副長の言葉に反論するなど考えもつかなかつたし、齊藤は、どうでもいいようだつた。

話はとんとん拍子に進み、藤田と齊藤は組んで動くこととなつた。不逞浪士の取り締まり、隊内の肅清。まずは藤田が前面に出て、相手の注意を引きつける。藤田に気を取られている相手を、齊藤が奇襲で討ち取る。これが、嵌はまつた。連敵連殺。まさしく無敵、であつた。

とはいへ、時代の趨勢すうせいは幕府、ひいては新撰組には厳しいものになつていつた。鳥羽伏見の戦いの敗北以後、幕府軍は連戦連敗。新撰組もまた。永倉、原田といった生え抜きの隊士が袂たもとを別ち、近藤は流山で新政府軍に投降、斬首された。その後、新撰組の残党、残党といつまでに数を減らした集団は北へ北へ。

藤田は、会津で脱落した。会津は彼の故郷であつた。不思議だつたのは、齊藤が藤田とともに会津に残つたことである。情か惰性か。

ともかく、藤田にとつては僥倖きょうこうだつたと言えよう。彼一人では、会津での戦いに生き残れはしなかつたから。

慶応四年（西暦一八六八年）会津藩は降伏。数日後、藤田も投降した。この時、捕虜の中に齊藤の姿はなかつた。

藤田が釈放され、時尾という娘と結婚してからも、齊藤は姿を現さなかつた。心配はしていなかつた。生きている。その点について、藤田は確信していた。なぜ、と問われても、説明はできない。ただ、分かつたとしか言いようがなかつた。

齊藤が、再び姿を見せたのは、藤田が東京に移住し、警視官（当時の警察官）となつてからだつた。刺客に襲われたのだ。新撰組が京で肅清の嵐を巻き起こしていた頃から、十年も経つていない。藤田、いや「齊藤」に恨みを持つ者がいてもおかしくはなかつた。

刺客は複数で、二、三合打ち合つたものの、それで追い詰められた。死を覚悟したその時、飛び込んできた影があつた。刺客たちを斬り伏せていく、その姿は肉眼では捉えきれなかつたが、藤田は齊藤であると確信していた。

果たして、それは齊藤であつた。

「久方振りだな」

そう声をかけると、齊藤は小さくうなずいた。その目が、京の、会津の、戦いの渦中にいた頃と同じ色をしている。この男は、戦争が終わつてから今まで、どんな生活を送つていたのだろう。そんな疑問が湧く。どうあれ、斬つていたのだろう、人を。

「すまない、助かつた」

また、小さくうなずく。何だか、藤田は悲しくなつた。

それから、また二人の奇妙な連帯生活が始まつた。齊藤は藤田を護衛するように、影となり付いてくる。代わりというわけではないが、藤田は自宅の離れを、齊藤の住居として貸し与えた。度々、夕食にも招いたりもした。

「いつも主人を護つてください、ありがとうございます」

そう時尾に頭を下げられた時の斎藤の顔こそ見ものだつた。幾多の白刃の中に身を晒して平然としていた剣の達人が、困惑していた。彼には、別段特別なことをしている、というつもりはなかつたのだろ。らしい、と言えば、らしかつた。

西南戦争が起つたのは、明治十年一月のことである。

西南戦争に、藤田は豊後口警視徴募隊の抜刀隊として参加することになった。警視官が兵隊として徴用されたことからも分かる通り、まだ当時の警視官は軍人的性格を色濃く残したものであつた。

藤田は五月に戦線に投入された。秘密裏に、斎藤も同行している。ここで、藤田は目覚しい功績を立てた。作戦は、新撰組の頃と同じ。藤田ができるだけ目立つように兵を動かし、それに気を取られる敵軍の背後から、斎藤が急襲。混乱した敵軍に、藤田が兵を率いて突貫をかける。これで、ほとんど勝負は決つた。大砲二門を奪取するなど、その武功は、当時の新聞に掲載されるほどだった。

このからくりに、薩軍（反乱軍）の中で、ただ一人気付いた者がいた。桐野利秋である。かつての名を中村半次郎といい、人斬り半次郎として恐れられた傑物。あの近藤勇をして、「薩摩の中村半次郎だけは相手にするな」と言わしめたほどだ。

彼が、気付いた。藤田五郎ではない、もう一人の斎藤一の存在に。それは、同じ人斬りとしての勘だつたろうか。

桐野は西郷に、この事を進言した。西郷は一言。

「おはんに任せもす」

その日から、桐野は姿を消した。

それから数日後。

朝から、藤田は何とはなしに嫌な気分であった。

どうにも、あの靴といつやつは履き慣れなくていけない。

右足に一箇所、左足に一箇所できた靴擦れを気にしながら、廁に向かう。途中、小石が積まれていた。用を足した後、藤田は部屋には戻らず、近くの森の中へ入っていった。斎藤がいる。當所で顔を会わせるわけにはいかないので、斎藤から藤田に話がある時は、このようにして連絡をつけるようにしていた。

「嫌な予感がする」

君も靴擦れかい。

そう軽口を叩こうとして、斎藤の真剣な顔に圧される。

「何がだい」

「分からん。分からんが、じつじつ時は必ず何かが起じつてきた」

斎藤は、焦りとも苛立ちともつかぬ表情で、

「もし、もしもだ。俺に何か起こつたら、逃げてくれ。くれぐれも、助けようなんて思つた。俺一人ならまだどうともなる」

「……分かつた」

藤田は、そう嘘をついた。

気のせいいか。

戦いが始まって、一時間。いつも通り、藤田が敵軍の注意を引きつけていた。斎藤がいる位置が死角になるように、巧みに兵を動かしていた。いつもながら、藤田の用兵の妙に、斎藤は舌を巻いた。一軍の指揮官として見た時に、斎藤は遠く藤田に及ばない。これまで自分が生き残れたのは、己の剣技ではなく、藤田の用兵のおかげだ。掛け値なしに、そう思つ。

そろそろ、動くか。

嫌な予感はまだ消えていないが、ここまで何もなかつたのだ。杞憂だつたのだろう。

斎藤は立ち上がりうと、腰を浮かせる。

その背後から、桐野が斎藤に斬りつけた。

不様に、地面を転がる。

斬られたのは左腕。深くはない。が、浅くもなかつた。剣は満足に振るえまい。ゆえに、致命傷。

桐野の表情に、驚きが浮いている。一太刀で仕留めるつもりだったのだろう。だが、右手一本で刀を構える齊藤の姿を見て傷の程度を察したのか、表情に余裕が戻つた。ゆっくりと刀を構え直す。示現流蜻蛉<sup>とんぼ</sup>の構え。

「齊藤一、でござりますな」

齊藤は答えない。もとより、返答は期待していなかつたのだろう。桐野の姿が、殺気に膨らんだ。

「お命、頂戴しもんで」

示現流、必殺の初太刀が繰り出される。

そこに飛び込んできた。

藤田五郎。

血飛沫<sup>しぶき</sup>があがる。藤田と桐野、双方がどう、と地面に倒れ伏した。桐野の刀は藤田の右肩から袈裟懸けに心の臓のあたりまで斬り下げられており、代わりに桐野の首が藤田の肩越しに振るわれた齊藤の刀によつて、胴から斬り飛ばされていた。

「藤田！」

桐野の死体には目もくれず、齊藤は身体を張つて自分を護つてくれた戦友<sup>じゆう</sup>の名を呼んだ。

「藤田、藤田！ 目を開ける！」

「難しい……注文をするな」

うつすらと藤田は眼を開ける。

「藤田！」

「齊藤……」

藤田は、弱々しい、だが穏やかな声音で、

「時尾と、子供たちを頼む」

「嫌だ！」

齊藤は叫ぶ。

「なぜ、お前が、お前みたいな奴が死ぬ。死ぬなら、俺の方だろう！」

「違う」

藤田はゆるゆると首を振る。

「死に理由なんかない。いつでも死は唐突に訪れる。だから、俺たちは懸命に日々を生きるんだ。死の瞬間、後悔しないように。俺に後悔はない。妻を娶り子を成し……何より、後事を託せる親友めとともがいる

藤田は、ふう、と大きく息をつき、

「頼むぞ」

そう言って、息を引き取つた。

齊藤一 藤田五郎は大正の御世まで生きた。床の間に座つたままの大往生おほむきだったという。辞世の句は伝わっていない。享年、七十二。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2001h/>

---

藤田と斎藤

2010年10月8日15時17分発行